

特別講演 1

「パーキンソン病における

治療ガイドライン（2011）以降の治療の進歩」

国立病院機構京都医療センター 神経内科医長

村瀬 永子 先生

パーキンソン病は高齢化にしたがい年々増加していて、神経内科以外の内科医でも薬剤コントロールが必要な機会が多くなっている。さらにこの 10 年の間で治療法が多岐にわたってきている。そのために内科医は常時治療法をアップデートしていく必要がある。パーキンソン病における治療ガイドラインが 2011 年に発刊されたが、もはやその内容としては古くなってきていて、本講演では、ガイドライン以降の治療法やその考え方を紹介し、以下の 3 点を中心に解説する。

①新薬の特徴

ドパミン以外の神経系を修飾するイストラデフィリン（®ノウリアスト）、ドパミン受容体サブタイプを広くカバーする貼付薬のロチゴチン。

②深部脳刺激(Deep Brain Stimulation: DBS)

NEJM（2013）に、運動症状がでてから 3 年以内の DBS 導入は運動症状・非運動症状を改善、薬剤減量も可能と発表された。早期の導入がその後の ADL の改善に導くことができ、積極的に治療オプションとして選択されるべきである。

③iPS

2006 年に発表され PD への臨床応用が待たれる段階である。コストや時間の面から、自家移植より他家移植で開始予定とのことである。